

書評

経済企画庁経済研究所編

『在庫変動に関する若干の分析』

同所 昭和 34 年 204 頁

「在庫論争」以来、在庫変動あるいは在庫循環はわが国戦後の景気循環の理解に欠くことのできない問題として登場して来た観がある。本書は経済企画庁研究所研究シリーズの1環として刊行されたものだが、執筆担当者名が明記されていない。私の知るかぎり、これは同研究所の並木信義氏が中心になって行われたリサーチであるようだ。

まず本書の構成をみるに、

第1章「景気変動と在庫変動」

第2章「景気変動と在庫率変動」

第3章「流通在庫の分析」

第4章「在庫変動と金融」

第5章「輸入原材料在庫の分析」

となっており、これに約 90 頁にわたる詳細な統計付表がつけられている。在庫変動の問題に興味をもつものにとって、これらの分析ならびに付表はいろいろな意味で役に立つことであろう。

第1章では、アブラモヴィッツにしたがって、在庫が景気変動に対してリードするかラグするかを在庫種類別に検討する。第2章では在庫率が景気変動にいかにか遅れて変動するかを、これも原料在庫、仕掛品在庫、製品在庫別に、しかも産業別にこまかに追求する。ここで注目されることは、仕掛品の在庫率変動が他種の在庫率変動と殆んど似た動きを示していることである。一般に仕掛品在庫は生産の動きに似た経過を辿りはしないかと思われるだけに、この点が注意をひく。しかし在庫率となると在庫を売上高で割った比率だから、分母の動き方により大きな波があれば、在庫率自体も当然の結果としてそれに反対の動きを示すこと明らかである。これは在庫を種類別にみたところで同じである。しかし、アブラモヴィッツがやったように、総在庫に占める仕掛品在庫の構成比率が工業生産の動き方と(或いはアブラモヴィッツはやっていないが工業生産の対前期変動率循環と)いかように関連しあっているかを検討してみたならば、案外分析者も工業生産と仕掛品在庫の変動関係を明示できたのではないかと思われる。この点は分析が試みられていないようだ。

第2章で一ばん印象的な叙述は、国民経済全体として

の在庫率(総在庫・GNP 比率)がアメリカでは第2次大戦前に比べて戦後が低く、短期的な波動を描きながらも、戦後はこの低い水準でほぼ横這い状態になろうとしているのに、日本では戦後急速な上昇を続け、26 年以来 32 年までに、14.7%から 35.6%まで2倍以上の急昇を示しているということである。

これに相当の理由があれば別だが、著者は統計の欠陥にその原因を見出しているのだから、とくに注目に値する1点であろう。つまり、昭和 30 年の「国富調査」における在庫残高を基礎として国民所得統計における在庫投資を毎期遡って差引いていくと、法人企業在庫はよいとして農業在庫および個人非農業在庫の推定値はまもなくマイナスに転化するといった奇妙な結果がえられる。著者はこの場合、農業在庫については、「国富調査」の結果でなしに「農家経済調査」からの推定値を用いることによって、この不合理な結果を回避できるから、問題は国富推計における農業在庫の過少推計にあると考える。けれども、非農業の個人企業在庫については、国富推計を用いても「個人商工業経済調査」からの推定値を用いても、いずれにせよ 27 年頃その在庫残高はマイナスになってしまう。それ故、問題は国民所得統計における個人企業在庫投資の推計がおそらく過大なためであろうと推測する。

私は著者の推測に同感であるが、なぜ過大かについて、次の1点を留意したい。「個人商工業経済調査」は業主1人当りの数字を毎期サンプルを更新しながら調べている。棚卸高については期首と期末とを調べ、その差を「棚卸高増減」として毎期掲げている。国民所得統計ではこの増減高を基礎にして個人企業の在庫投資を推計する。けれども毎期の期末棚卸高は次期の期首棚卸高とは必ずしも合致していない。昭和 28 年度第1期から昭和 32 年度第4期までの「棚卸高増減」とある欄を累計すると、業主1人当たり、19 万 3 千円になる。しかし、28

	A	B
昭和 28 年度	+30,258円	+22,027
＃ 29 年	+35,303	-26,556
＃ 30 年	+32,685	+19,826
＃ 31 年	+35,717	+59,877
＃ 32 年	+59,724	-58,948

備考：Aは「個人商工業経済調査」の「棚卸増減高」を単純に合計したもの、Bは毎年度の第4期期末棚卸高から第1期期首棚卸高を差引いた数字である。

年度第1期の期首棚卸高を単純に 32 年度第4期の期末棚卸高と比較すると、業主1人当たり在庫投資は5万2千円という約1/4にちかい数字に激減する。毎年度にここに掲げる表によってA、B2つの推計方法(その意味は表の備考に説明)にしたがう業主1人当たり在庫投資の動きをみると、Aは毎年全部プラスであってそれには景気循環がうまく

反映していない。ところがB方式によると、実際の景気循環をうまく反映した在庫投資循環がくっきりと浮び上がってくる。なぜB方式がこのような成功的な結果を収めることが出来、国民所得推計を基礎にしたA方式が不合理な結果を収めたかの原因の追求はこの短評では避けるほかない。ここでは、B方式によると、個人企業の在庫投資における過大評価を下方修正できるだけでなく、在庫投資推計として現実の景気循環をより正しく反映する系列をつかみ出すことができることを指摘するにとどめたい。

第3章は割愛して、第4章「在庫変動と金融」に移る。この問題は評者自身が過去において貸出の先行性について1仮説を提起した点でもあり、また企業規模別にみると、在庫循環に二重構造が反映しているという考え方に到達したこともあって、格別の興味をもって読んだ。貸出のリード要因、ラグ要因の存在にかかわらず、実際にはリード・ラグ関係が明瞭でなくどちらかといえば同時変動をしているというのが著者の分析であり、中小企業の在庫サイクルの先行性については、私の見解と同じである。私自身、貸出の先行性を曾つて強調したことがやや行き過ぎたことはこの際認めておいてよい。貸出は個人企業への貸出を含み、在庫投資は法人企業のもののみをとると、個人企業の在庫サイクルの先行性が原因となって、貸出は当然に法人在庫投資に先行する。しかし、一面においてこの現象が両者のカバリジの相違にもとづくことは、在庫循環の二重性の発見と同時に、私の気付いたところであるが、他面移動平均を施したあとでやや不正確だが若干貸出に先行性が残るという点が依然として認められた。

第5章は著書の一ばんお得意のところらしい。「在庫論争」では輸入原料在庫の増加が輸入量と原料消費量の差として間接推計された。著者はこの間接推計を誤差の多い手法と考え、品目別に在庫変動の推計を通産省の在庫数量統計から直接法で積み上げる。ところが通産省の原材料統計は輸入原材料の全部を網羅してはいない。とりわけ、6類に属する金属類の把握率に問題があり、28年第1・4半期の21.4%から、30年第4・4半期の23.2%までは変化がないが、32年第3・4半期には2.2%に激減している。これは神武景気中にふえた鋼材などの輸入が通産統計では抜けているからである。著者はこれをおぎなうため「6類関係補正」を行っておられるが、著者の直接法がどの程度確実かはこの6類補正がjustifiableに行われたかどうかにかかるとみるほかない。不幸にして、その根拠が示されていないから、この部分の推計が直接法の1弱点を構成するとみるほかない。著者の推計によると

32年にはこの6類補正が輸入原材料在庫増加額の7割というウェイトを示しているからである。カバリジのふくらましも、第2類について一律に把握率75%として行われ、他の項目については一切ふくらましがオミットされていることもいささか心残りがする。また把握率が81.8%から69%の間にあるものを一律に75%適用に踏みきった理由も明示しないと、当然のことながら読者に疑念を起すことになる。

最後に「在庫論争」の評価についてであるが、著者は31年度中の6類補正額を84百万ドルと抑え、それを含まない企画庁調査課の輸入原材料在庫増にかんする数字(284百万ドル)を368百万ドルに引き上げるべきだとする。またこれを含んでいる下村治氏の推定は当初530百万ドル、その後410百万ドルに修正したといわれるが、下村氏は最終的には3つ手法からの同時接近によって再び5—6億ドルという線を固守するに至っている。ところが著者の推計値は272百万ドルにすぎない。

したがって、「従来の判断は本推計の結果より多少多いようであるが、しかしジャーナリズムにおいて喧伝されたほど数字上の相違はなかった」という著者の断定はとんでもない行き過ぎといわねばならない。企画庁調査課推計をふくらました368百万ドルは、著者の推計272百万ドルに対して約1億ドル(35%)大きいし、下村氏の5—6億は著者の推計より2.3—3.3億ドル(85%—120%)も大きいのである。私は直接法に長所の存在することも承認するが、通産統計では業者が輸入原材料消費を過大に、在庫残高を過少に報告する傾向があるという話も聞いている。つまり、外貨割当の下では、消費実績が基準となっているため、業者は消費を過大に申告する傾向があったと思われるからだ。こういうわけで、直接法が絶対に正しいということを前提して行われる議論はいささか断定的にすぎる嫌いがないかを恐れる。いわんや、直接法でも6類補正などでかなりの推定を含まざるをえない点では間接法と同じ危険をもっているように思える。

本書を読んで、いろいろの示唆をえたと同時に以上の感想や危惧をいただいたことをここに卒直に記しておく。しかしこのことは本書の価値を決して傷けるものではない。本書は従来看過されていた領域へのすばらしい第1歩として、今後も多くの研究者によって顧みられるであろうことは、評者の確信してやまぬところである。

〔篠原三代平〕